

中国念仏図の源流と展開

苑 克 柱（宗柱）

一 念仏図の源

禿氏祐祥は念仏計数の方法を①豆または他の穀類を使用するもの、②数珠を使用するもの、③念仏図を使用するもの、という三類に分けた。禿氏は『仏祖統紀』における明州（現在の浙江省観県）の咎定国の擘窠図印施の事例を挙げ、念仏図が南宋嘉泰年間（1201-1204）に起源したと推断した¹⁾。

咎定国の擘窠図を印施した嘉泰年間の二百年前、同じく明州地域の北宋時代に、知礼は延慶院で萬人念仏会を發起し、勸進方式として、念仏図も使用していた。『四明尊者教行録』の記載によると、その計数の方法は次のとおりである。

其建會之法、勸請會首二百一十人、各募四十八人、逐人請念佛懺願曆子一道。每日稱念佛名一千聲、懺障道重罪、發菩提願、為度衆生、取於淨土、請畫佛數於曆子上²⁾。

その建会の方法は、まず会首を二百十人勸請し、〔その二百十人の会首はまた〕おのおの四十八人を募集する。会員は各自で念仏懺願曆子を一冊受け取り、毎日佛名を一千声称し、重罪を懺悔し、衆生を度すために、淨土に往生することを求めるよう菩提願を發す。そして、念仏数を曆子に記入する。

知礼の念仏会では、成員ごとに念仏懺願曆子を一冊配備させ、毎日一千声の佛名を称し、併せて念仏の数量を曆子に記入するよう要求されている。

1) 禿氏祐祥「念佛図の起源並に伝播」、『龍谷史壇』第2巻、第1号、1929年。

2) 『四明尊者教行録』巻1、『大正藏』第46冊・862中。

延慶院念仏会は北宋祥符六年（1013）に成立し、百九十余年を経て衰えず、南宋嘉泰三年（1203）までも存続していた³⁾。その時まで、念仏曆子は使用され流伝していたと考えられる。咎定国の制作した擘窠図は知礼の念仏曆子の様式を参考にしたものかもしれない。両宋時代に、浄土結社が大いに流行し、浄土教は急激に民間に浸透し、庶民的な宗教になった。中でも浄土教を弘めた最も有力かつ大いに活躍していたのは、天台宗の諸師である。天台宗の発祥地と隆盛地である浙江地域において、庶民への接化手段として、念仏図の出現は偶然ではない。

知礼の使用した曆子は、印紙曆子とも言う。宋制によれば、官僚が赴任するにあたり、朝廷は各種の項目をつける記帳簿を發給し、官僚に任上で書き入れさせ、その功過を政績考察の拠り所としていた。それは「印紙曆子」と称される。酒井忠夫は、漢王朝から、中国の王朝は普遍的に功過殿最の方法を採用し、官僚の業績に対して、考査を行うということに留意した。漢代に、すでに後世のような功過格思想及びそれに伴う民間信仰の萌芽が存在していたという⁴⁾。知礼の念仏（記功）懺願（訟過）曆子は、明らかに功過格の特徴を有している。

北宋時代に、念仏図で念仏を勧進したもう一人は宗蹟である。『樂邦文類』では、その事を次のように記している。

建立蓮華勝會、普勸修行念佛三昧。其法、日念阿彌陀佛、或百千聲乃至萬聲、迴願往生西方淨土、各於日下、以十字記之。⁵⁾

蓮華勝会を建立し、あまねく念仏三昧の修行を勧めた。その方法としては、毎日阿弥陀仏を念じ、或は百千声ないし一万声、その功德を西方淨土往生に廻向する。各自で念仏数を当日の期日の下の欄に、十字で書き込む。

宗蹟は元祐年間（1086-1094）に、廬山結社に倣い、蓮華勝会を結んだ。その念仏計数の方法は、毎日仏号を称念し、或は百千声或は一万声、そして、念

3) 『四明尊者教行録』卷1では、「六年癸丑（1013）、是年二月十五日、創建念佛施戒會。師於祥符五年十月、親製疏文、至今誘化、此會抵今凡一百九十載不廢。往古來今其被化者、不知幾何人哉」（『大正藏』第46冊・857下）と記している。

4) 酒井忠夫『増補 中国善書の研究』上冊423頁、国書刊行会、1999年。

5) 『樂邦文類』卷3、『大正藏』第47冊・193下。

仏の総数を十字で引き、名簿の期日の下に記すと規定されている。

この念仏計数法は、総合的に数珠と念仏図を使用したはずである。小笠原宣秀は宋代僧侶の庶民教化運動の中で、積極的に数珠と念仏図を使用したと指摘した⁶⁾。これは事実に符合している。宗隲の発明した十字計数法は、いまだに東林寺の四十八願念仏図に用いられている。その影響の深遠さが垣間見られる。

二 念仏図の流

(1) 明末における株宏の念仏教化及び念仏図の印施

兩宋時代の念仏図はいずれも現存していない。我々が現在見られる最早期の念仏図は明代のものである。明代に、一種の新型の念仏図である作福念仏図が出現した。作福念仏図を提唱して印施した者は蓮宗第八祖である雲棲株宏であった。

株宏の作福念仏図そのものは『雲棲法彙』には収録されていないが、その図説は収録されている。

勸修作福念佛圖説

人天路上作福為先 生死海中念佛第一

人間天上、快樂逍遙、皆因廣作諸福。最緊最要、故曰為先。若欲高出人天、速超生死、直登不退、則有念佛往生一門。最尊最勝、故曰第一。偈曰、作福不念佛、福盡還沈淪、念佛不作福、入道多苦辛、無福不念佛、地獄鬼畜群、念佛兼作福、後證兩足尊。

作福 但作一福、福下一點、不論大小多寡。

孝順父母	忠報君王	裝塑佛像	印造經典
齋供僧伽	敬事師長	營修寺宇	流通善法
禁絕宰殺	買放生命	飯食饑民	衣濟寒凍
開掘義井	修理橋梁	平砌街道	普施茶湯
看療病人	給散藥餌	伸雪冤枉	出減刑罪

6) 小笠原宣秀『中国近世浄土教史の研究』23頁、百華苑、1963年。

安養衰老 撫育孤孩 埋藏屍骨 給與棺木
饒免債負 義讓財産 還他遺失 救濟患苦
祈禳災難 薦拔亡魂 勸和争訟 生全人命

念佛 千聲填一圏、白黄紅青黒可填五次。無事身問者、時時勤念、有事纏身者、早晚課念。至心發願、求生淨土。平日遇福便作、作訖還念、即以所作之福回向淨土、求願往生。善人（某甲）受持⁷⁾。

人と天の世界では福を行うことを優先し、輪廻の海の中には念仏を第一とする。

人界と天界で快樂をゆったり享受するのは、みな広くもろもろの福を行うことによる。

それは最も緊要なことなので「先」という。もし人天を高く飛び出し、速やかに輪廻の世界を超え、直ちに不退の境地に到達したければ、念仏往生の一門のみがある。これこそ最尊最勝なので「第一」という。偈に曰く、福を行っても念仏しなければ、福が尽きればまた輪廻に沈淪する。

念仏しても福を行わなければ、道に入っても苦辛が多い。

福を行わず念仏もしなければ、地獄餓鬼畜生の群れに入る。

念仏してさらに福を行えば、後に仏両足尊を証得する。

作福 一福を行うたびに、それに対応する項目の下に一点をつける。行う福の大小や多少は問わない。

親孝行をする 君主に忠を尽くす 仏像を装飾する 經典を印施する
僧侶を供養する 師長を尊敬する 寺院を修繕する 善法を広める
殺生を禁止する 生命を放生する 飢民を飯食する 衣服を布施する
井戸を掘る 橋梁を修理する 街道を整備する あまねくお茶を施す
病人を看護する 薬餌を与える 冤罪を晴らす 刑罪を軽減する
老人を養護する 孤児を撫育する 死骸を埋葬する 棺を与える
債務を軽減する 財産を譲渡する 紛失物を返す 患苦を救済する
災難を祈禱する 亡霊を追善供養する 争訟を調停する 人の命を全うす

7) 『山房雜録』卷2、『嘉興大藏經』第33冊・104下～105上。

る

念仏 千声ごとに一圈を塗りつぶし、白・黄・紅・青・黒の順に塗りつぶすならば、五回使える。

用が少なく忙しくない者は、いつも念仏する。用があって忙しい者は、朝晩を利用して念仏する。心から発願し、浄土に往生することを求める。平日に福を行う機会があればすぐに行い、その後で念仏する。行った福を浄土に回向し、往生することを求める。善人（某甲）、以上のことを受持する。

図と図説はもともといっしょに流通していたはずであるが、『法彙』を結集した時に何らかの原因で図が削除されてしまい、図説だけが収録されたとは私は考えている。日本で印施した作福念仏図と株宏のもう一種の念仏図である六斎月齋図こそは、図と図説がいっしょに印施されるものである。以上のことから、図説は念仏図の解説として元来図と一体になっていたが、それを『法彙』に収録した際に、図が剥離されてしまい、図説だけが収録されてしまったことに誤りはないのである。

株宏の勤修作福念仏図は現在中国では現存していない。しかし、幸いなことに黄檗宗僧である独湛により、日本に流入して印施され流伝しており、その全容を見ることができる。

独湛（1628-1706）は念仏独湛とも言い、清代順治十一年（1654）に隠元に随い日本に渡来し、のち慧林性機の席を継ぎ、黄檗宗の第四代の住職に任じられた。独湛は禅法を参究する他、雲棲株宏に私淑し、禅と浄土との双修を主張し、日本浄土宗の忍濶と義山とも親交があった。

独湛の勤修作福念仏図の識語の所記によると、その印施の縁起は次のとおりである。

此圖於震旦行世久矣。至大清康熙年中、奉旨頒行天下、普勸化念佛。豫得一張、與無塵居士奉持。居士以日國未有此圖、今鐫刻流通、令天下人念佛修福、同生浄土、則利益無量焉。念佛千聲填一圈、白黃紅青黒、可填五次。寶永甲申重陽 支那獨湛瑩識獅子林普勸定佛往生

この図は長らく中国に流伝している。清代の康熙年間に至り、聖旨を奉じて天下に頒行し、あまねく念仏を勸化した。私は一張を得、無塵居士に与

え奉持せしめた。居士は日本にはこの図がないゆえに、今刊刻して流通し、天下の人々をして念仏修福し、同じく浄土に生まれしめれば、その利益は無量であると思った。念仏して千声ごとに一圈を塗りつぶし、白・黄・紅・青・黒の順に塗りつぶすならば、五回使える。宝永甲申（1704）重阳（9月9日）支那独湛性瑩識（印【獅子林普勧定佛往生】）

独湛が述べたように、勧修作福念仏図は株宏以降ずっと流传しており、清代の康熙年間になると、朝廷より詔旨によって頒布され、天下に流通した。独湛は一張を手に入れ、法友の無塵居士に贈った。無塵居士の説得を受け、ついに鐫刻して流通することを決意したと記されている。

独湛の印施した勧修作福念仏図には、「勧修作福念仏図説」のほか、株宏作の「髑髏図説」が収められている。松永知海の統計によれば、勧修作福念仏図は日本で前後十回印施されたという。初版と二版は宝永元年（1704）に黄檗獅子林で刊刻された。その後、とぎれとぎれに印施されて流通し、昭和六年（1931）まで続いたようである⁸⁾。

独湛の触発を受け、日僧の雲洞も日本版の百万遍念仏図説を印施した。その後、このたぐいの図説は続々と制作されて印施されてきた。日本では二百年にわたって念仏図が広汎的に念仏勧導に用いられていた。日本の往生伝、例えば珂然の『新聞顕驗往生伝』及び雲嶺桂鳳の『現証往生伝』においては、みな独湛の勧修念仏図説による念仏の事例を記している。株宏の勧修念仏図説は独湛を経由して、日本に流入し、日本の念仏教化に広汎かつ深遠な影響を与えたということになるだろう⁹⁾。

作福念仏の思想は、株宏が独創したものではない。『観経』では浄業三福が説示されており、文殊が五台山で法照のために開示した法語にも、「諸修行門、無過念佛。供養三寶、福慧雙修、此之二門、最為其要」¹⁰⁾ という語があ

8) 松永知海「『勧修作福念仏図説』の印施と影響——獅谷忍叡を中心として——」8頁、『仏教大学大学院研究紀要』15号、1987年。

9) 勧修作福念仏図の日本浄土教への影響については、前掲松永知海の論文及び田中マルコス撰『黄檗禪と浄土教』（法蔵館、2014年）、長谷川匡俊撰「近世念仏者と外来思想——黄檗宗の念仏者独湛をめぐって——」（『季刊 日本思想史』第22号、1984年）などを参照。

10) 『広清涼伝』、『大正蔵』第51冊・1114中。

る。ただし、これまでに株宏のように作福の科目をこれほど精細に分かつ人はいなかった。株宏の列挙した作福条目は、その自作の『自知録』に出ると指摘されている¹¹⁾。株宏の作福思想は、明末の功過格が盛んに行われたことに関わっている。

功過格の思想は、古い歴史を持っており、儒仏道の三教ともに関連を持っている。宋代に最初の功過格である『太微仙君功過格』が出現した。この『道蔵・洞真部』に収録されている功過格は道家系統に属し、行善の報いを来世に設定している。その目的は仙道を求めることである。明末の雲谷より伝授された袁黄の功過格及び株宏の『自知録』、この二部の仏教系統の功過格は、みな『太微仙君功過格』から生まれたものである。雲谷より伝授された袁黄の功過格は、報いの設定を今生に転換した。雲谷の勸善思想を領受した袁黄の著した「立命篇」及び後の「謙虚利中」「積善」「改過」の諸篇は、行善で科挙功名・子・財を求めることを鼓吹し、明末清初の士人らの中で大きな反響を呼んだ。明末は仏教復興の時期であり、仏教庶民化・世俗化の時期でもある。株宏はこの時代の潮流に従った。本来、浄土教が宣揚したのは、浄土に往生し、来世の永生を求めることであって、現世の生活に対してはあまり注目していない。株宏は念仏往生を高揚すると同時に、世俗の人天善福を排斥することはなかった。株宏の念仏は知識人の仏教と民衆の仏教の様相を兼ねて具えていたのである。



【写真1】勸修作福念仏図、
佛敎大学蔵本、安永七
年（1778）本

11) 禿氏祐祥「念佛図の起源並に伝播」、『龍谷史壇』5・6頁、第2巻、第1号、1929年。
松永知海「『勸修作福念仏図説』の印施と影響——獅谷忍濃を中心として——」13～15頁、『佛敎大学大学院研究紀要』15号、1987年。

勸修作福念仏図の他、株宏はまた帰戒念仏図・六齋月齋念仏図・念仏追薦亡霊往生念仏図という三種の念仏図を制作した。この三種の念仏図と作福念仏図との違いは、作福を説かず、いずれも単純に念仏の数量を記すことにある。中でも、念仏追薦亡霊往生念仏図以外、ほかの二種は作福念仏図と同様に、『法彙』においては図が収録されておらず、図説しか収録されていない。ただし、清代以降印施した『西方公據』には六齋月齋念仏図を収めるのが一般的である。今はこの三種の図説及び『西方公據』版の六齋月齋念仏図を列して出しておく（下線部は、図の使用方法）。

歸戒圖説

歸依佛、不墮地獄、我今歸依佛。

歸依法、不墮餓鬼、我今歸依法。

歸依僧、不墮旁生、我今歸依僧。

一不殺生。凡有命者、不得殺害。

二不偷盜。一鍼一草、不問不取。

三不邪淫。禮法持身、不犯外色。

四不妄語。妄言綺語、惡口兩舌、悉禁不説。

五不飲酒。酒名狂藥、亂性迷魂、禁不入口。

既受歸戒、諸惡莫作、衆善奉行、一心念佛求生淨土。諸惡、謂不忠不孝不仁不義。如是諸惡、不能盡舉、但瞞天昧心等事、便不應作。衆善、謂忠孝仁義。如是衆善、不能盡舉、但上順天理下合人心等事、便應力行。念佛、謂一心持念阿彌陀佛萬德洪名。每日或念一千二千三五七千、或至於萬、隨意多少。凡一千念則點一圈、先白、次黃、次紅、次青、四遍點過、滿四十八萬。持此佛前證明、乃議微細用心、參入玄境。(弟子某甲)受持¹²⁾。

仏に歸依し、地獄に墮ちない。我、今仏に歸依す。

法に歸依し、餓鬼に墮ちない。我、今法に歸依す。

僧に歸依し、畜生に墮ちない。我、今僧に歸依す。

12) 『山房雜録』卷2、『嘉興大藏經』第33冊・105上。

- 一、殺生しない。一切の命がある者を殺してはならない。
 - 二、窃盗しない。一針一草も窃盗してはならない。
 - 三、邪淫しない。礼法で身を守り、妻以外の女性を犯してはならない。
 - 四、妄語しない。綺語・悪口・両舌もことごとく禁止して言わない。
 - 五、飲酒しない。酒は狂薬であり、人性を乱すので、決して口にしない。
- すでに三帰依と五戒を受けた以上、諸悪をせず衆善を行い、一心に念仏して浄土に往生することを求めるべきである。諸悪とは、不忠・不孝・不仁・不義のことである。このような諸悪は、一一挙げればきりが無い。天を欺きて良心に背くことだけは一切すべきではない。衆善とは、忠・孝・仁・義のことである。このような衆善は、一一挙げればきりが無い。上は天の道理に順じ、下は人心に合うことだけはみな務めて行うべきである。念仏とは、一心に阿弥陀仏に具わっている万徳の名号を持念することである。毎日念仏して、或は一千・二千・三五七千声、或は一万声、称える数の多少は任意である。念仏して千声するたびに、一圈を塗りつぶし、まずは白色で、次いで黄・紅・青色で一一塗りつぶす。四遍塗りつぶし終わったら四十八万声を満たす。この図を仏前に持っていき証明となす。よく用心すれば、玄妙の境地に入る。(弟子某々) 受持す。

六齋月齋圖説

六齋 毎月六日、初八、十四、十五、廿三、廿九、三十。如遇月小、廿八、廿九當持日齋。

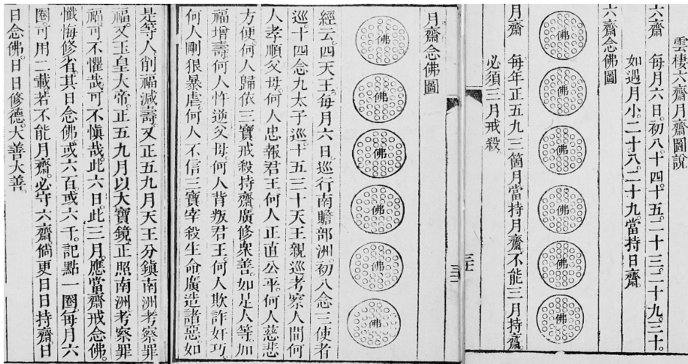
月齋 毎年正五九三箇月、當持月齋。不能三月持齋、必須三月戒殺。經云、四天王毎月六日巡行南瞻部洲、初八廿三使者巡、十四廿九太子巡、十五三十天王親巡。考察人間何人孝順父母、何人忠報君王、何人正直公平、何人慈悲方便、何人歸依三寶、戒殺持齋、廣修衆善。如是等人、加福增壽。何人忤逆父母、何人背叛君王、何人欺詐姦巧、何人剛硬暴虐、何人不信三寶、宰殺生命、廣造諸惡。如是等人、削福減壽。又正五九月、天王分鎮南洲、考察罪福。又玉皇天帝正五九月、以大寶鏡正照南洲、考察罪福。可不懼哉、可不慎哉。此六日、此三月、應當齋戒念佛、懺悔修省。其日念佛或六百或

六千、記點一圈、毎月六圈、可用二載。若不能月齋、必守六齋。儻更日日持齋、日日念佛、日日修德、大善大善¹³⁾。

六齋 毎月の六日・八日・十四日・十五日・二十三日・二十九日・三十日。小の月に遇えば、二十八日・二十九日に齋戒を受けるべきである。

月齋 毎年の正月・五月・九月、この三か月に月齋を持つべきである。三か月の齋戒を持ってなければ、必ずこの三か月の間は、殺生を戒めるべきである。経には、四天王は毎月の六日に南瞻部洲を巡回して視察し、八日・二十三日には四天王の使者が、十四日・二十九日には四天王の太子が、十五日・三十日には三十の天王がそれぞれ巡回して視察すると説いている。彼らはこの世界の誰が親孝行をするか、誰が君主に忠を尽くすか、誰が正直で公平であるか、誰が慈悲方便を行うか、誰が三宝に帰依し、殺生を戒めて齋戒を受け、広く衆善を修するか、などを考察する。このような善を行う人に対しては、その福寿を増加する。また、誰が両親を忤逆するか、誰が君主を裏切るか、誰が他人を詐欺するか、誰が暴力を振舞うか、誰が三宝を信じず、殺生をし、広くもろもろの悪をなすか、などを考察する。このような悪を行う人に対しては、その福寿を減らす。なお、正月・五月・九月に、四天王は南洲に親しく降臨し、人間の罪福を考察する。帝釈天は正月・五月・九月に、大宝鏡で南洲を照らし、罪福を考察する。それは恐るべきことではあるまいか。だから、この六日間（六齋日）や三か月間（三長齋月）に、齋戒を受持し念仏し、懺悔し反省するべきである。毎日念仏して或は六百声或は六千声、一圈を塗りつぶし、毎月六圈を塗りつぶすならば、二年使える。もし三長齋を受けられないならば、必ず六齋を受けなさい。もし毎日齋戒を受持し、毎日念仏し、毎日福德を行えば、それはとても大きな善根になる。

13) 『山房雜録』巻2、『嘉興大藏經』第33冊・105上中。



【写真2】『西方公據』所収の六齋月齋念仏圖、佛教大学蔵本、底本は乾隆三十年（1765）広州海幢寺本

念佛追薦亡靈往生圖説

首七念佛（幾）萬（幾）千（幾）百。

二七念佛（幾）萬（幾）千（幾）百。

三七念佛（幾）萬（幾）千（幾）百。

四七念佛（幾）萬（幾）千（幾）百。

五七念佛（幾）萬（幾）千（幾）百。

六七念佛（幾）萬（幾）千（幾）百。

七七念佛（幾）萬（幾）千（幾）百。

通共念佛（幾）十萬（幾）千（幾）百。

凡人於至親亡歿、悲傷不已。然亡者無益、生者有損、不若停悲、思為薦濟。經言、人死皆於七七日內托生、當即此時、作諸功德。今勸七七請僧誦經之外、更加自己念佛。每日持念一千五百、有餘力、或至二三四千、七日總計若干、填註七下。七七日滿、回向焚化、能令亡者罪障消滅、冤愆解釋、早生善趣、不滯冥途。孝子思親、慈親憶子、兄弟姊妹、夫婦眷屬、師生朋友、念恩欲報、皆可行之。儻其初喪、未及見此圖説、亦可補念十萬八千、或更多。隨意福資亡者、功德不可思議。信（士某人女某氏）為薦亡親某人持念¹⁴⁾。

14) 『山房雜録』卷2、『嘉興大藏經』第33冊・105中下。

首七に念仏する（幾）萬（幾）千（幾）百。
二七に念仏する（幾）萬（幾）千（幾）百。
三七に念仏する（幾）萬（幾）千（幾）百。
四七に念仏する（幾）萬（幾）千（幾）百。
五七に念仏する（幾）萬（幾）千（幾）百。
六七に念仏する（幾）萬（幾）千（幾）百。
七七に念仏する（幾）萬（幾）千（幾）百。
延べ念仏する（幾）十萬（幾）千（幾）百。

凡そ人は肉親が亡くなった時、悲しみがやまないことは当然である。しかし、それでは亡くなった人に利益はなく、存命中の人を損ねる。悲しみを止め、追善供養の方法を考えるべきである。経には、人が死んだ後は四十九日以内に必ずや別の生命に託生する。その時、もろもろの功德を作るべきと説いている。今は四十九日で僧侶を請い、お経を読んでもらう他、さらに自分も念仏することを勧める。毎日念仏して千五百声、余力があれば二千・三千・四千声、その数を表中に記す。七日の総計ごとに七回記す。四十九日が満てば、この図を焼却して回向する。亡くなった人をして罪業を消滅して冤愆を解消し、冥途に堕ちず善道に早く生まれさせられる。孝子は親を偲び、慈親は子を思念し、兄弟姉妹・夫婦眷屬・師弟友人に対してご恩に報いようとするならば、みなそれを行うべし。たとひ初喪の時、この図を見なくても、十万八千声或はもっと多い数を補い念じても良い。亡くなった人を利益し、その功德は不可思議である。信者（某人）は、亡き親の追善供養をするために持念する。

この三種の念仏図の対機及び役割は異なる。帰戒念仏図の対応する対象は、帰依したばかりの者である。六齋月齋念仏図は、菩薩戒を受けた、或は菩薩戒を受けなくても持齋を発心する人のために設けたものである。念仏追薦亡霊往生念仏図は死者を追善供養するためである。

こうして、株宏の四種の念仏図は、勸修作福念仏図と帰戒念仏図は平時行儀に用いられ、六齋月齋念仏図は別時行儀に用いられ、念仏追薦亡霊往生念仏図

は臨終行儀に用いられる。株宏は念仏の平時行儀・別時行儀・臨終行儀に、それぞれ念仏図を制作して印施した。

勸修作福念仏図	平時行儀
帰戒念仏図	
六齋月齋念仏図	別時行儀
念仏追薦亡霊往生念仏図	臨終行儀

曹之の研究によれば、中国書籍の挿画史は、早ければ二千年あまり前の漢代に遡ることができるという。宋代に彫版印刷の普及に伴い、書籍の挿画は多くなる一方である。明代に挿画の応用は広汎であり、各種類の書籍に及んだ。そのうち、小説・戯曲の挿画が最も多かった。万暦年間に鄒迪光は『勸戒図説』を輯し、勸善・戒悪の事例をそれぞれ百条列举し、事例ごとに図と図説が付されている。その他、張居正は『帝鑑図説』を輯し、焦竑は『養正図解』を輯した。王延訥は『人鏡陽秋』二十二巻を撰し、歴史典故を輯録し、人物ごとに一篇の伝記があって、併せて挿画一枚が付されており、一六一〇年ごろに刊刻した。株宏の時代には、図説版の勸諫書及び善書が大量に出現してきた¹⁵⁾。

株宏の教化活動では、図説が大量に使用されていた。以上の四種の他、また「髑髏図説」「放生図説」がある。なお、株宏の万暦三十七年（1607）に刊刻した『牧牛図頌』は、十頌からなっ



【写真3】明代の『勸戒図説』の局部、孝養祖母、万暦二十二年（1594）刊本

15) 曹之『中国古籍編輯史』598～601頁（武漢大学出版社、1999年）及び遊子安『善與人同——明清以來的慈善與教化』58～70頁（中華書局、2005年）を参照。

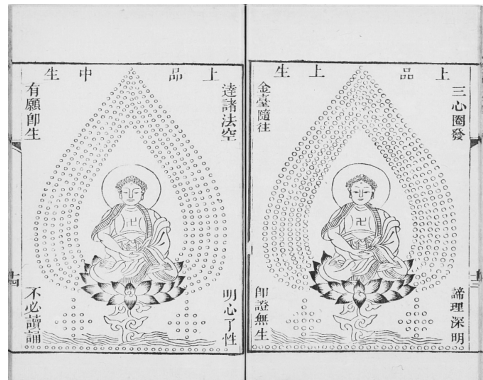
ており、一頌一図をなしている。雲棲弟子である朱西宗は、株宏の『戒殺放生文』に挿画をつけ、刊行して流通し、それを『殺生炯戒』と名づけた。この図説類の印刷物と書籍は単純な文字作品と比べると、もっと視覚化され勸導力を増強したことは疑いない。

(2) 清代以降の『西方公據』の印施

以上述べたように、株宏は作福念仏図と単純に念仏数量を記す念仏図という二種類の念仏図を制作して印施した。松永知海は、明末清初に作福念仏図の使用が主流を占めたと推断した。その理由は当時の社会では勸修作福の書籍（うち、『自知録』ある）が広く流行していたからである¹⁶⁾。清中期に入ると、この二種類の念仏図の流通には消長が出て、作福を説かない念仏図が次第に主流になってきた。もっとも、作福念仏図は依然としてある形で流伝してきており、今日までに至る。

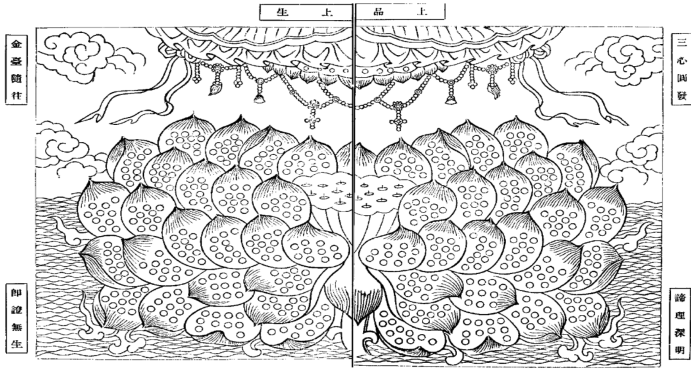
株宏以降、中国本土で流行している念仏図は主として九品蓮台念仏図である。それは『西方公據』という書に保存されている。

乾隆十三年（1748）に、蘇州寒山寺の上宏作の序によると、この書は沈清塵・周遠振両居士によって輯録されたものである。書の内容は主に古徳論議及び往生靈験であり、中には九品蓮台念仏図が付されている。現在見られる最古の『西方公據』版本は、佛教大学図書館所蔵の光緒五年重刊本である（分類番号283）。その底本は乾隆三十年（1765）の広州海幢寺本であり、乾隆十三年の初版からわずか十七年を隔てる



【写真4】『西方公據』所収の九品蓮台念仏図、上品上生・上品中生。佛教大学蔵本、底本は乾隆三十年（1765）広州海幢寺本

16) 前掲松永知海論文13頁。



【写真5】彭際清『重訂西方公據』所収の九品蓮台念仏図、上品上生、卍統蔵版（卍統62、p.268～269）

ので、原版であると推定されている。九品蓮台念仏図は図と頌からなっており、頌の部分は宋代元照の「十六観頌」を採用し、一図一頌をなしている。

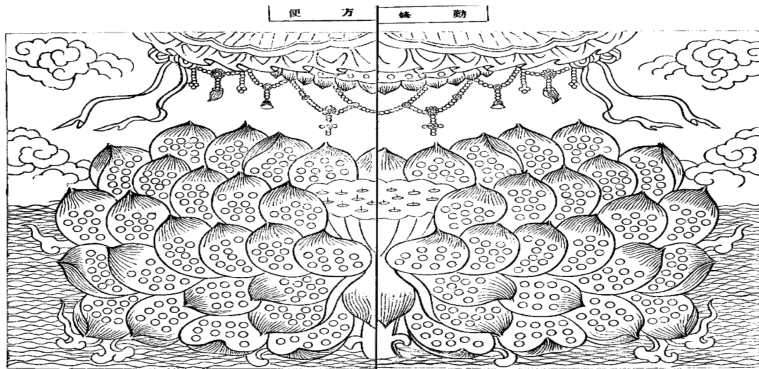
図の後ろに付されている使用説明¹⁷⁾によると、この九品蓮台念仏図全体には、五千四十八圈ある。念仏して百声或は千声ごとに、硃筆で塗りつぶし、全部塗りつぶし終わったら、また別の色で塗りつぶし、数回使えるという。臨終時、図を焼却し、それを往生の証明（公據）とする。

ちなみに、この版の『西方公據』には株宏の六齋月齋念仏図を収録しているが、株宏の勸修作福念仏図を収録していない。言及さえもしなかった。これによると、遅くとも乾隆中期に株宏の勸修作福念仏図はすでに中国本土から散逸したと推測されている。

『西方公據』の内容が蕪雑なので、世に問うて四十四年後（1792、乾隆五十七年）、彭際清はそれを編集し直し、念仏図を作り直し、蓮華で仏像を代替した。

重訂版の中で、彭際清は株宏の六齋月齋念仏図を収録しなかったが、株宏の作福念仏図をある形で復活させた。彼は九品蓮台念仏図の他、往生助行図を四枚作り、それぞれ誦経・懺悔・作福・普度という四項に対応させた。その作福項には、株宏の「勸修念仏図説」全篇を収録するだけでなく、図もつけた。

17) 「右九品蓮台図、图中凡五千四十八圈、每念佛一百（一千）声、以硃笔点一圈、日久圈满、又以杂色点之。临命终时、将此图焚化为凭、仗此功德、往生净土」



【写真6】彭際清作の作福念仏図、元統蔵版（元統62、p.294～295）

独湛の刊行した勤修作福念仏図と比すると、『重訂西方公據』では念仏と作福を分離させて作福しか残されていないのみならず、図ですら大きく様変わりした。

彭際清の重訂版以降、『西方公據』から多数の版本が生まれた。印光版までに以下の六種がある。

- (1) 清道光二十八年（1848）北京版
- (2) 清咸豊三年（1853）年雲南省采芹村版（底本は武昌宝通寺本）
- (3) 中華民国五年（1916）福州鼓山湧泉寺版
- (4) 中華民国十二年（1923）寧波天童寺版
- (5) 一九五七年に出版した台湾台中蓮社版の「重印弁言」によると、編者の参考した文献には中華民国十二年（1923）成都文殊院版がある。これによると、中華民国十二年（1923）成都文殊院版の存在が確認できる。

- (6) 中華民国十四年（1925）杭州慧空経房版

『西方公據』の内容の混乱及び版本の不統一を鑑み、中華民国十九年（1930）に、浄土宗第十三祖である印光は『西方公據』をもう一度修訂し、経呪語録と念仏図を上下二冊に分けて流通した。株宏の「六齋月齋図説」に対して、上冊の経呪語録にはその原文を収録しているものの、下冊の念仏図には図を収録していない。ここに至ると主流の念仏図の中では、株宏の念佛図はその姿が消え

てしまった。

印光は『西方公據』の版本混乱を鑑み、一つの善本を重訂して流通しようとした。しかし、印光以降、彭際清の重訂版が消えない一方、また多くの『西方公據』の新版本が続々と世に問うた。これらの版本の内容は一様ではなく、大きな差異さえある。筆者の知る限りでは、以下の数種がある。

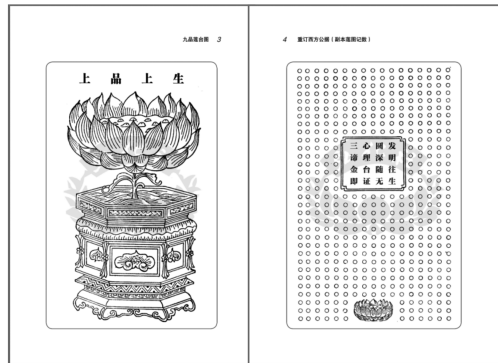
- (1) 一九五七年台湾台中蓮社版
- (2) 一九九一年成都文殊院版
- (3) 一九九三年広州光孝寺版
- (4) 新都宝光寺版、年代不詳
- (5) 香港仏経流通処版、年代不詳
- (6) 二〇〇三年北京八大処版

以上の六種のうち、(1) (3) は同じ系統に属している。(1) は、周邦道は中華民国五年（1916）福州鼓山湧泉寺本と中華民国十二年（1923）成都文殊院版の基礎の上で増削を加えて成ったものである。(3) は、(1) の復刻版である。周氏はなぜ善本と見なされている印光版を参考しなかったかは不明である。

(2) 成都文殊院版の巻首には、中華民国十一年に作られた、覚初と署名する序言がある。これによると、中華民国十二年（1923）成都文殊院版の復刻版であることが確認できる。

(4) 新都宝光寺版と (5) 香港仏経流通処版の年代は不詳である。刊行時期は一九八〇年から二〇〇〇年までと推断されている。両版の内容は現在見られる最古の版本である乾隆三十年広州海幢寺版と同じである。

(6) は、『阿弥陀経』の後ろに付されているものであり、以上の諸本と比べると、



【写真7】印光『重訂西方公據』所収の九品蓮台念仏図、上品上生、蘇州弘化社印施

紙幅は短い。

これらの版本、また印光版及び印光以前の版本を加え、乾隆十三年（1748）に初版が刊行されてから今に至るまで、『西方公據』の版本は少なくとも十余種が出現した。平均二十余年に一つが出現した。これらの版本の多くには、株宏の六齋月齋念仏図を収録しているが、彭際清の重訂本¹⁸⁾には「勸修作福念仏図説」を収め、かつ部分的に作福念仏図を復活させた以外、株宏の勸修作福念仏図は、中国の文献から姿が消えた。それは作福念仏図の凋落を反映していると考えられる。

なお、一部の『西方公據』の版本には、伝株宏作の念仏図を勸持する語録を収めている。

蓮池大師曰、此圖念一轉、輪回永免。念二轉、能度父母。念三轉、能度公婆。念四五轉、元祖昇天。自己能證佛位、惟在信心誠念。

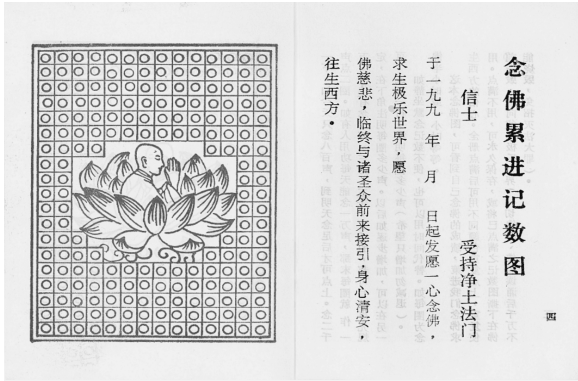
蓮池大師曰く、「この図を一遍念じ終われば、輪廻は免れられる。二遍念じれば、父母を度すことができる。三遍念じれば、公婆を度すことができる。四五遍念じれば、先祖が天上に昇る。自分は仏の悟りが開かれ、ただ信心から念仏するのみ」と。

言うまでもなく、これは株宏の名に仮託する偽作である。だが、その背景を無視してはならない。それは一方では念仏と民間信仰との結合を反映し、他方では株宏の中国浄土教における地位と影響力が反映しているからである。ほかの浄土宗祖師ではなく、株宏に仮託すること自体は、株宏の民間念仏勸化の中での巨大な影響力と説得力を示していると言えるであろう。

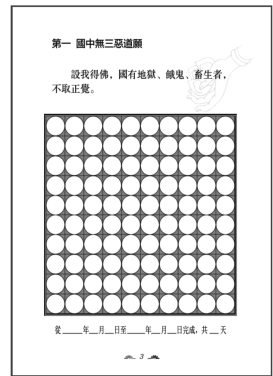
（3）改革開放以来のほかの念仏図

中国大陸の仏教の復興は、前世紀の八十年代の改革開放から始まった。仏典流通の中心として、福建省莆田広化寺は仏教復興の中で重要な役割を果たしていた。広化寺仏経流通処は、印光重訂版の『西方公據』を流通した他、一九九

18) 彭際清の重訂本には『卮統藏經』本の他、また揚州藏經禪院本と金陵刻經処本、二つの単行本がある。そのうち、金陵刻經処本は未だに流通している。



【写真8】 莆田広化寺が制作して印施した念仏図



【写真9】 廬山東林蓮社の四十八願念仏図、第一願

〇年代に、自らの念仏図を制作して流通していた。

この念仏図は『西方公據』系統と比べると、九品蓮台をキャリアとしないようになった。

二〇〇〇年以降、廬山東林寺に所属される東林蓮社は、四十八願念仏図を制作した。魏訳本の四十八願の願文を選び取り、一願に一図で、延べ四十八図ある。その計数の方法は、次のとおりである。念仏して一万声、圈に一つの横線を引き、また一万声念じ、圈に一つの縦線を引く。第三の一万になると、圈の中に小さな圈を引く。一つの圈は三回使用できる。四十八願をすべて引き終われば、一億四千四百万の念仏数を記すことができる。

台湾の民間では、「阿弥陀仏接引善人往生西方」という往生船様式の念仏図が使用されている。この図は『アジア仏教史・中国篇Ⅱ 民衆の仏教』に収録されている¹⁹⁾。その制作年限は不明である²⁰⁾。愚見によれば、おそらく清代・中華民国時期の作品であろう。明清以来の水陸法会では、終わりの送聖の時、位牌を収めて西方船に置く。そして、西方船を焼却し、一切の亡霊がみな船に乗って西方に往生したことを象徴する。この図の制作は水陸会の西方船を参考

19) 中村元（ほか）監修・編集『アジア仏教史・中国篇Ⅱ 民衆の仏教』71頁、俊成出版社、1976年。

20) 松永知海は前掲論文において、この図に言及したが、その制作年限を特定しなかった。

にしたのではないか。この図は昔は大陸では刊行されることがあったが、現在は流通していない。ただ台湾には使用している人がいることが確認できるだけである²¹⁾。

三 結語

北宋に端を発する念仏図には二種類がある。それは作福念仏図と、作福を説かない念仏図である。株宏の作福念仏図の中国に流伝した歴史は、わずか百年ほどある。明末清初に、善書印施と慈善社団の成立をシンボルとする勸善運動は全国を席卷した。この潮流に乗って、株宏の作福念仏図は明代万暦年間から清代康熙年間にかけて百年あまり流伝した。その後、独漑により日本に流入し、二百年にわたって印施されて流通しており、日本の念仏教化に深遠な影響を及ぼした。作福念仏図の他、株宏はまた数種の念仏図を印施した。株宏は念仏の平時行儀・別時行儀・臨終行儀に対して、それぞれ念仏図を制作した。しかし、これらは中国本土でほとんど伝承を失ってしまった。

清乾隆年間から、『西方公據』版の九品蓮台念仏図が流行し始めた。『西方公據』には前後十数種の異なる版本があつて、念仏図も多種多様であり、概ね原本・彭際清重訂本・印光重訂本という三つの系統に分けられる。原本念仏図の重要な特徴は、蓮華台の上に仏像を載せることである。彭際清本は、仏像を除去し、蓮華台だけを残した。印光本はまた念仏図を部分的に調整し、併せて念仏図と経呪語録を二冊に分け、単独で流通した。

現在、中国に流通して使用されている念仏図は、主として蘇州弘化社の印施する印光重訂の九品蓮台念仏図及び廬山東林寺の印施する四十八願念仏図である。その他、台湾には、「阿弥陀仏接引善人往生西方」念仏図を使用する人がいる。これら以外の念仏図は、文献史料として調査の対象とはなりうるが、実際に使用する人の有無については知るよしもない。

(所属 仏教大学大学院)

21) 次のウェブサイトを参照。https://9-dragons.com.tw/fs1689/?p=288。